

じょっぴんワード

教化の現場

大谷スカウト連合協議会は、1956年に結成され、その母体である日本連盟に対して「仏教章」制定の働きかけをし、1962年に第1号の仏教章授与者が誕生した。奇しくも宗門では、「家の宗教から個の自覚へ」のスローガンのもと「真宗同朋会運動」がスタートした年であった。

北海道教区において、ボーイスカウト活動を積極的に進めている札幌第4団では、寺院の境内にある研修センターを利用して様々なスカウト活動を行っている。そもそもボーイスカウトは、心身ともに健全な青少年の育成を目的としており、年齢により部門が分かれ、活動内容も変化してくる。それに伴い年齢が変わるとその度に、上進式を行うのであるが、その際に3つの誓いを宣言する。それはつまり一人のボーイスカウトとしてはもちろんの事、仲間と共に仏の教えを聞いていくという意味合いも込められている。

一見スカウト活動は、姿・格好・国旗掲揚という内容からして、自衛隊の予備隊ではないのかとの意見を聞くことがあるが、それは規律を重んじ、集団生活を大切にしていることにつながる。

また、「すべての加盟員は明確なる信仰をもつことを奨励する」という教育規定のこの言葉が「真宗同朋会運動」の願いと重なっていることに注目したい。

大谷スカウトとは「み仏と私とが共同作業するそれが大谷スカウトだ」の詩・言葉にあるように、今日まで南無阿弥陀仏の六字と共に歩んできた歴史である。そのことを願いとしてきたのが大谷スカウト活動なのであるということに注目していきたい。



上進の際に共に3つの誓いを宣誓し、仲間とのつながりを再確認する。

たからです。教団の危機とは何であるか。信心がはなはだ不透明だというのが教団の危機です。他力回向の信心が他力回向と心得ている自力の信心に転落している。これが教団の危機なんです」(『行証に生きる人』高木宏夫編)と、どこまでも一人いちにんの信心の問題が「教団の危機」であるということとを、この度の検証を通して確かめさせていただいた。

そして、同時に多くの大切な課題と共に歩んできた50年の中で、同朋会運動に求められているものは、「心から親鸞聖人の教えによって信仰にめざめ、代々檀家と言っていただけのものが、全生活を

あげて本願念仏の正信に立っていただくための運動である(中略)世界中の人間の真の幸福を開かんとする運動である」(『真宗』1962年(昭和37)巻頭文)と明記されてあったように、私たちの生活している中にある現代の問題に目を塞ぐことなく、何処までも我が事としていくという社会性を取り戻す事であった。

「宗祖としての親鸞聖人に会う」という基本理念のもとでお迎えした宗祖750回御遠忌は、3月11日まさに御遠忌オープニングイベントが行われる前日の東日本大震災により、3月第1期御遠忌法要は中止とし「被災者支援のつどい」

となった。4月5月の第2期第3期は法要内容を変更して「被災者と共にある御遠忌」として行われ、どちらも、同様に御仏事として、被災された方々に思いを馳せ、悲しみ傷みを共にし、親鸞聖人の御真影の前に身を据え、親鸞聖人の名のもとに於いての、お念仏の教えから自身が問われつけ、人間として生きることの尊さを、そして、親鸞聖人の教をその生涯から教えられていく者として、自身が生きていくことを証していく事なのである。

池田勇諦師は大桑斎師の「御遠忌の歴史」という講述をうけて「御遠忌は単に法要を勤めることに目的があるのではない。50年を節目とする教団(人)自身の自己省察と、時代社会への更なる開放の機縁として勤められるものでなければならぬ。それこそが知恩報徳の現在義にちがいないからだ」(『南御堂』2011年3月号)としている。

700回御遠忌は同朋会運動が興る機縁となった。50年を経て迎えた750回御遠忌が同朋会運動の再出発の機縁となつてゆかないならばならない。それは、もう一度同朋会運動が始まった精神に立ち帰っていくこと以外に再出発ということはない。(完)

御遠忌テーマ「今、いのちがあなたを生きている」
 教区御遠忌テーマ「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信

【第67回】

真宗門徒の生活を回復しよう
 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しきましょう
 すすんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

しんらんweb 検索 ほぼ毎日更新中

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 再出発(三)

教化本部 古卿 誠幸

戦後の混乱期を経て、高度経済成長期にさしかかった50年前の1961(昭和36)年、宗祖700回御遠忌法要が4月14日より28日までの日程で厳修された。その時の様子を「期間中に各地から真宗本廟に上山した参詣者は、100万人を超えたと記録されている。近郊からは団体参拝バスを連ねて上山し、境内のバス駐車スペースは各地からの団参バスで埋め尽くされた。また、遠方からは鉄道を使って長時間かけて真宗本廟に足を運んだと言われている。また、聖跡巡拝バスや市電市バスの特別路線の運行の他、宿泊施設や電車、バス、山内各所で伝道(法話)が行われ、御遠忌のムードを一段と高め、京都の街全体をあげて御遠忌をお迎えした」(『南御堂』2011年3月号)と当時の様子が紹介されている。

また「昭和31年(1956)4月3日、宮谷法含宗務総長は700回御遠忌お待受けの基本精神として『宗門白書』を発表しました。

その最も重要な骨子は、清沢教学を基に、教学の充実と自信教人信の誠を尽すべき人材の養成を第一の課題としたことにあり、そのことは650回御遠忌以後の宗門体制を全面的に懺悔し、否定し、改革することが700回御遠忌の眼目であることを意味しました。(中略)病氣引退の宮谷法含に代って訓覇信雄が宗務総長となって、いよいよ翌年7月1日には真宗同朋会運動が正式に発足、9月より同朋教団の形成、同朋社会の実現をめざした第1次5ヶ年計画による特別伝道が各教区ではじまりました」と、700回御遠忌は「戦時教団の体制を懺悔し、同朋会運動を生み出した真宗再興の御遠忌」(『同人』第192号)と位置付けている。

多くの参詣者を得て盛大に厳修された700回御遠忌を機縁とし、「真宗再興」



御遠忌に出遇ったことを一人一人が日常生活の中で確かめ、次世代へ伝えていくことが願われている。

の願いをもって、真宗同朋会運動が発足した。その50年の歩みは、教団問題、部落差別問題、靖国神社問題をはじめ多くの大切な課題と共にあった。そして、その中で何度も「教団の危機」ということがいわれ続けてきた。しかし、同朋会運動の提唱者である訓覇信雄師は「私は昭和37年に同朋会運動を提案した。その時はこのような事件(教団問題)はなにもない、きわめて平穏なときであった。そのときなぜ同朋会運動を提案したか」というと、宗門は危機だと考え